

生き残ったモブマスターは死にたくない

ソーダ水の民

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

転生したモブマスター高橋誠は、過酷な人理修復の旅を生きて終えられるのか!?

# 目 次



# 一話

はじめまして、俺はf g oの世界に転生したモブだ。

神様なんかにも会わなかったからチートもないただのモブ。唯一の救いと言っているのか分らないが、一応魔術師の家庭に生まれた。

うちの家系は魔術師と言っても根源を目指すことに熱心ではなく普通に育ててもらった。

一応前世と同じ日本人として生まれてきたので生活に不便はなかった。

さて、どこににいるかというと、そうカルデアだ。

最初にf g oだと気づいたのは高校で主人公、藤丸立香が居たことだ。

俺は前世と変わらずオタクをしていたので会話はほとんど無かった。しかし、遠目から見ても常に周りに人がいる陽キャオブ陽キャだった。

そんな俺がカルデアに何故居るのかと言われたら何のひねりもない答えだが主人公と同じ数合わせのための人員としてスカウトされたということだ。この時点で出来るだけ物語に変化がないよう物語に関わらずに生き残ろうと決意した。

自己紹介はこんなところにして、今どうなっているのか話そう。俺はそう、特異点F

冬木の街にいる。

辺り一面は真つ赤な炎に包まれていて近くには竜骨兵がいた。さてと、終わったな。人生終了のお知らせだ。サーヴァントなし、一応戦闘に使える魔術はあるがそのうち魔力が切れて終わりだ。

とりあえずカルデアから通信が来るまで生き残ろう。それが今一番の目標だな。

「さて、とりあえずは安全そうな場所に移動するか。」

そう呟き歩き出そうとした直後、

「もしもし誠君かい？こちらカルデア管制室だ、聞こえたら返事をしてくれ!」

タイミングが良いのか悪いのか。

「聞こえてるよ、そっちは無事かロマン?」

「全然無事じゃないさ。それより君以外にもそっちにマシユと立香君がいる。そこから1キロ先の霊脈地に向かってくれ。」

「わかった、急いで向かう。」

さてと、なんとかかなりそうだ。

本当に良かった。

「おつ アレッポいいな。」

やっと見つけた。少し迷ったがなんとかなってよかった。

「先輩、誠さんがいらつしやいました。」

「どうも、初めまして、藤丸立香です。」

「敬語じゃなくていいさ、俺は高橋誠。キミと同じ日本人だ。」

「挨拶もそこら辺にして。まだやることがあるんだから。」

オルガマリー所長だ。

「その事は僕から説明するよ。二人にはサーヴアントを召喚してもらう。マシユの盾を触媒にして、縁召喚になるが頑張ってくれよ二人とも。」

とうとうだ、とうとう俺のサーヴアントを召喚出来る。贅沢は言わない。意思疎通が出来れば良いんだ。

「俺から召喚します。」

さあ、どんなサーヴアントだ！意思疎通が出来れば良い！

「あー……あ？ はいはい、アサシンの刑部姫です。ね、もう帰っていいかな？

ダメ？」

「えっ、だつダメです。」

「あつそう。」

おつきーだ！ やったぜ！ 引きこもりバンザイ！